

# 楽しい研究生生活 —意志あるところに道は拓ける—



## 金澤秀子

慶應義塾大学大学院薬学研究科、  
教授、薬学博士。  
共立薬科大学大学院博士後期課程修了。  
専門は物理薬剤学・分析化学。

私が今の仕事に就くまでの道のりは、遠回りでもロスが多いものでした。学部を卒業後、研究職を志望して日本電信電話公社（現NTT）の研究所に入りました。研究者として自立するために、一時は働きながら学位をとることも考えましたが、仕事が終わった後や休日に研究する大変ハードな毎日が続けられずに、結婚を機に退職してしまいました。そして家庭と仕事の両立を考え、病院薬剤部で半年間研修し、一旦は薬剤師として働きはじめました。しかし1年もたたないうちにやはり研究に未練があることに気づき、大学時代の恩師に声をかけていただいたのがきっかけとなり30歳で大学院に入学しました。社会人を経て、再び大学に戻ってみると講義や研究はとても新鮮でした。博士論文をまとめる頃の終電とタクシーを乗り継ぐような毎日でもそれなりに楽しい時間となりました。丁度バブルの真最中であつたため、企業戦士である夫は私以上に早朝から深夜まで働いており、夕飯の支度もいらないという当時の私にとって大変好都合な状況でもありました。大学院を修了し博士の学位を取得したのが35歳のときでした。その後所属した東京大学生産技術研究所で出会った工学系領域は、薬学出身者の私にとって魅力溢れた分野でした。たとえば当時の薬学会などでは、ブラスライドでの発表がほとんどでしたが、工学系の学会では、ビデオを使ったプレゼンテーションがあり、そのインパクトの強さに驚きました。工学系のものづくり研究は、ゼロの状態から全く新しいことを生み出す夢の世界に見えました。そのときに学んだ機能性高分子が現在の研究テーマでもあります。非常勤講師の時代を経て、ようやく正規のアカデミックポジションに就いたのは40歳直前でした。論文を執筆するようになったのも遅かったため、同年代の研究者に大きく水をあげられたスタートでした。機能性高分子研究を始めたばかりで、まだ研究業績も少なく、女性であることもあって、将来に漠然とした不安を感じていました。そんな中で国際学術誌への研究論文の投稿が、一つのチャンスを与えてくれました。私のような

無名の研究者の論文がアメリカ化学会の Analytical chemistry の表紙になりました。そのお陰もあって、翌年には国内の学会から4件の賞をいただきました。海外の国際学会での受賞も同様で、専門分野の研究発表を高く評価していただいたときは、本当に研究を続けてきて良かったと思いました。私のように運動神経も芸術的才能も全くない人間が、このような経験ができるのは、やはり研究者になったからだと思っています。未来ある若い人達に伝えたいことは、研究に限らず、やりたいことがあれば、たとえ遠回りしたとしても夢をあきらめずに挑戦して欲しいと思っています。

大学の研究室で実験に没頭する楽しい毎日を想像して、現在の職業を選んだつもりですが、現実はなかなかそういきません。“私は実験がうまいのだ”と心の中で思いつつも、最近ほとんど実験に携わることができなくなりました。時には、仕事も家事も両立しなくてはならないから、女性の研究者はつらいと愚痴をこぼすときもあります。それでも長年続けているのはなぜかと聞かれると、それはやはり研究が楽しいからというのが一番の理由です。自分の想像していたものとは少し違った毎日ですが、たとえば多くの時間がパソコンの前での書類作成や会議をするのに費やされているのが現状であったとしても、自分の好きなことを職業にできるなんて幸せだと思っています。今では研究室に配属された学生が、研究の楽しさを感じてくれようになることが私自身の楽しみにもなっています。無限のパワーを秘めた学生や若い研究者が熱心に研究をしている姿を見ると、なんだか自分まで元気が出てきます。

最近では、国立大学でも女性研究者を積極的に採用する傾向にあり、とても喜ばしいことだと思っています。今後さらに推進するためには、育児環境の整備が望まれます。ある程度の規模以上の大学や研究所が保育所の設置あるいは近くの保育施設との提携を積極的に行うというようなサポート体制が必要です。夢をもった女性研究者の活躍を期待しています。